

四国横断自動車道 勝浦川渡河橋の整備に関する環境保全検討委員会 (第6回)

第5回委員会における主な意見及び回答



令和4年10月27日

2-1 第5回委員会における主な意見及び回答

第6回委員会開催に当たっての第5回委員会の意見及び回答

意見内容		意見に対する回答	ページ
1	仮栈橋を10年間程度設置するのであれば、流況解析などを行ったうえで、仮栈橋の設置による生物への影響を検討したほうが良い。	仮設橋の設置に関する影響について検討した結果、干潟及び潮下帯・潮間帯、既設護岸に生息する底生生物に対する仮設栈橋及び洗堀による事業影響は小さいと考えられる。 ※委員会開催後に回答説明済み	P2-3
2	台船を用いた方法から仮栈橋を延伸する方法に変更した理由として、当初の計画と比較して、掘削箇所、浚渫量などを整理しておく必要がある。	平成27年～令和元年の河床上昇により、コンクリートミキサー船（平成27年計画時）の進入が不可能となった。このため、浚渫あるいは陸上からの仮栈橋施工が必要であり、仮栈橋施工時の河川内設置合計面積（150.4㎡）は、台船を用いた施工方法による河口最浅河床部浚渫面積（最大16,015㎡）と比較して極小であるため、仮栈橋施工に変更する。 ※委員会開催後に回答説明済み	P4
3	潮下帯生物調査地点について、現在の底質に対するクラスター解析により事業中断前と比較して底質が変化しているのかどうかを整理しておく必要がある。	クラスター解析の結果、底質が変化しやすい滞筋では年によって類型が若干変化している地点はあるが、分布傾向が過年度と同様のため、ハビタット区分については令和3年度まで変化していないと考えられる。 ※委員会開催後に回答説明済み	P5
4	カワウについて、工事中に現在のコロニーから個体が分散し、アユの食害等の被害が周辺地域に拡大する可能性もあるため、対応について考えておいたほうが良い。	河口部右岸側に形成されているカワウのコロニー及びその周辺におけるカワウの生息状況について工事前～工事中に監視を継続する。コロニー利用状況が変化し周辺地域への拡大が認められた場合には工事影響の有無を検討し、必要に応じて関係機関と調整しながら対応策（防除等）を検討します。	—
5	モトマチハナワラビを含むオオハナワラビ亜属の移植については、工事によって移植箇所の環境が変化する可能性もあるため、工事開始後も生育に適した環境が維持されているかモニタリングしていただきたい。	工事区域内の個体は、直接改変により生息地が消失するため、保全対策として工事着手前に移植を行う。移植後の個体については工事中も生育確認を行う。	—
6	津田の貯木場跡地は、外来生物であるアルゼンチンアリの生息箇所となっており、工事箇所にアルゼンチンアリが生息していることを認識し、工事箇所の外側に個体を運び出さないようにすることが必要である。	工事によって発生する土砂の取り扱いについては、今後関係機関と協議しながら検討していく。	—

【解析結果のまとめ】
仮設栈橋の橋脚による洗堀深及び影響範囲の推定結果

(1) 洗堀深

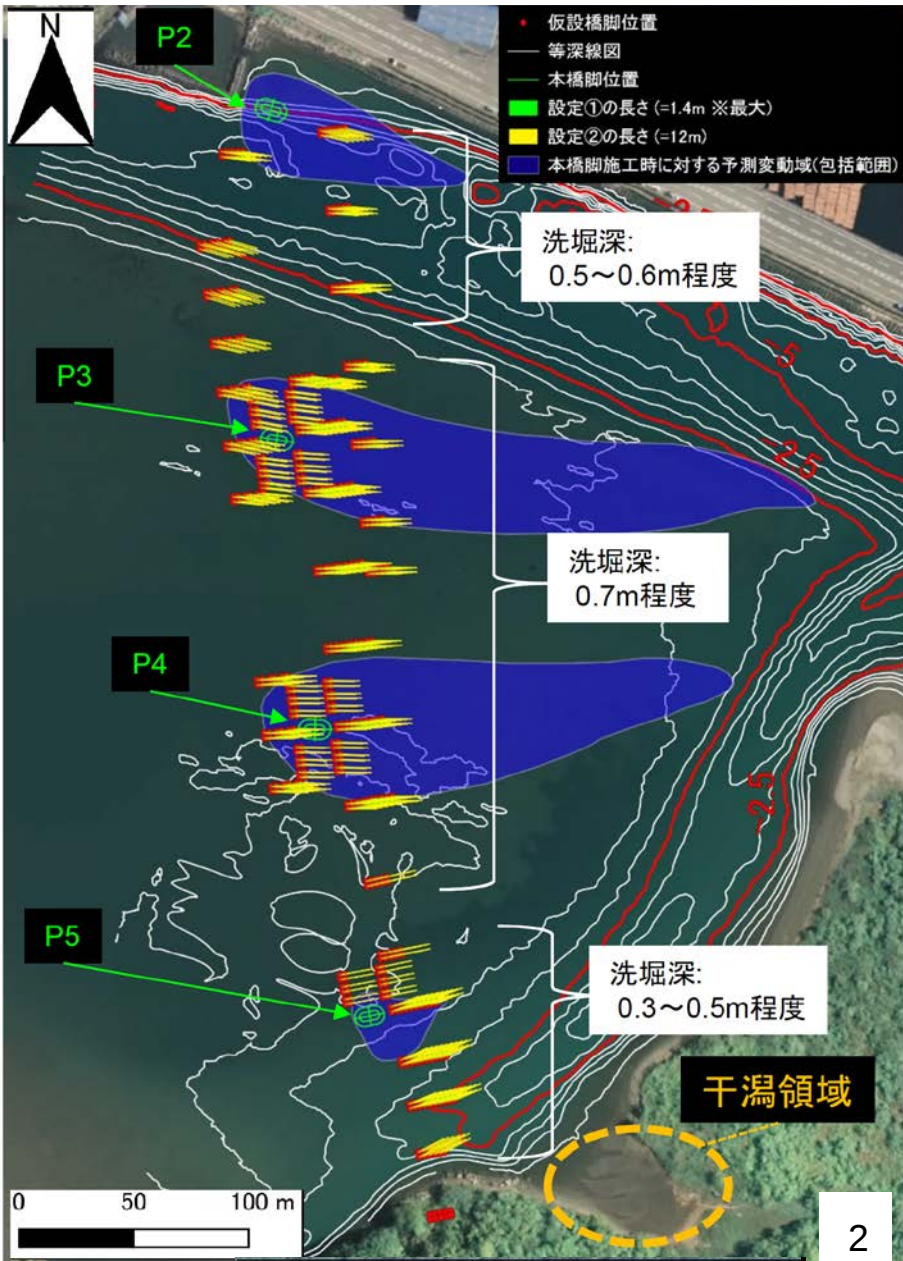
橋脚位置	洗堀深
北側(橋脚P2付近)	0.5～0.6m程度
中央部(橋脚P3、P4付近)	0.7m程度
南側(橋脚P5付近)	0.3m～0.5m程度

(2) 影響範囲

- ①洗堀深さと平均粒径から求まる水中安息角による影響範囲の延長は、**最大長さ1.4m程度**
- ②架設栈橋の橋脚幅(0.4m)における地形変化による影響範囲の延長は、**L=12m**
右岸側では**干潟領域から50m以上離れている。**



仮設栈橋の橋脚による干潟への影響は極めて小さいと推定される。



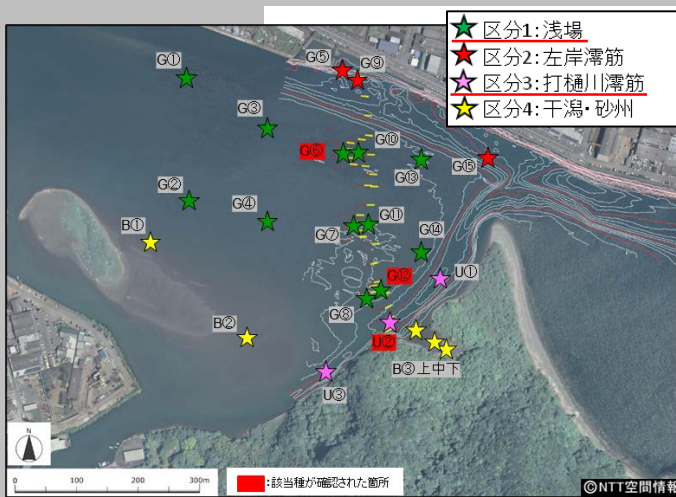
【橋脚による底生生物への影響について(潮下帯・潮間帯調査、既設護岸における付着生物調査)】

- 過年度も含め、[] でのみ、[] の4種を確認。
- これら4種については、[] のハビタット区分に生息する種であり、底質のクラスター解析の結果では、同様のハビタット区分は周辺にも広く存在していることから、上記の種の生息環境は周辺にも広く存在していると考えられる。

→潮下帯、潮間帯、既設護岸に生息する底生生物への仮設栈橋の橋脚による影響は小さいと考えられる。

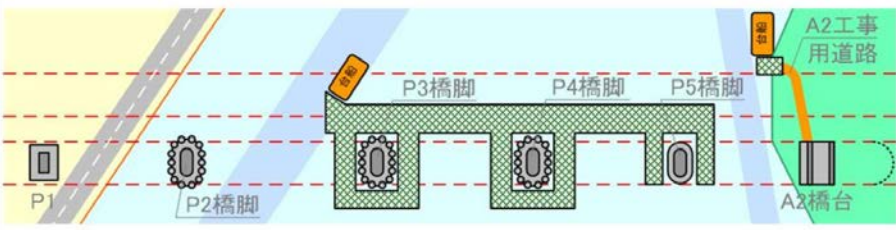
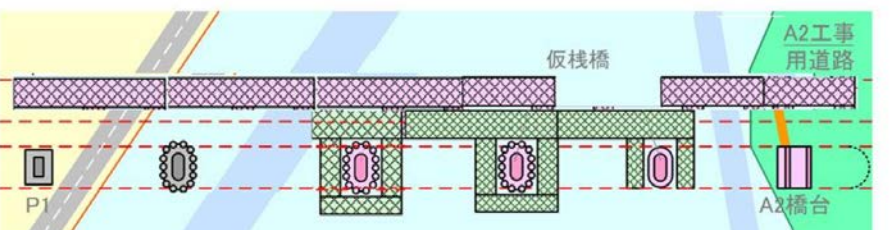
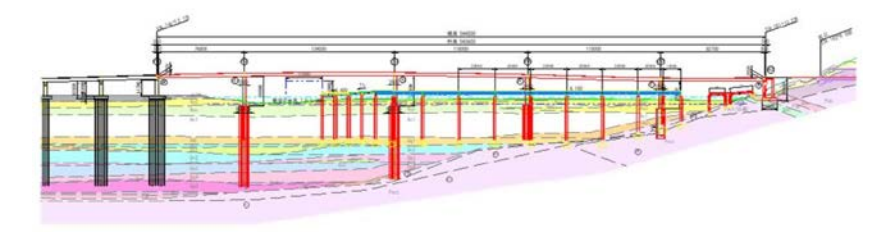
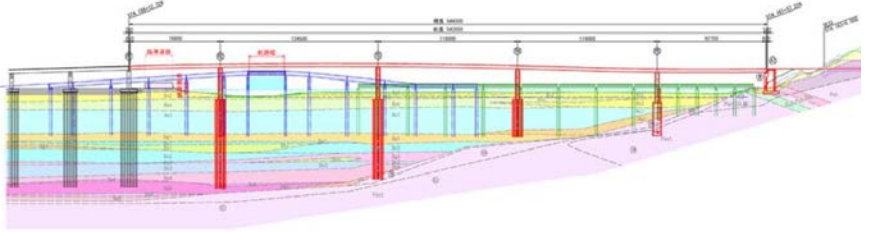
潮下帯・潮間帯、
既設護岸
における付着生物調査

[] は、規約細則1(3)に該当するため非公開



【台船施工と仮設栈橋施工の比較】

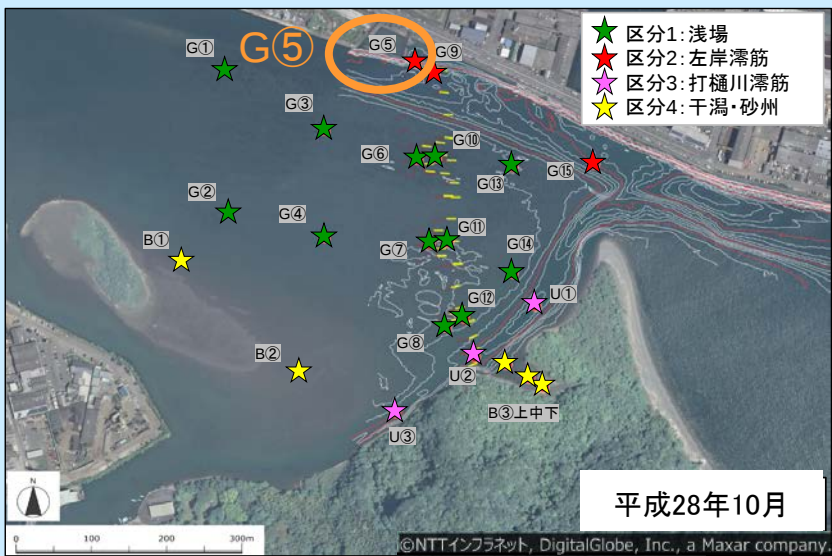
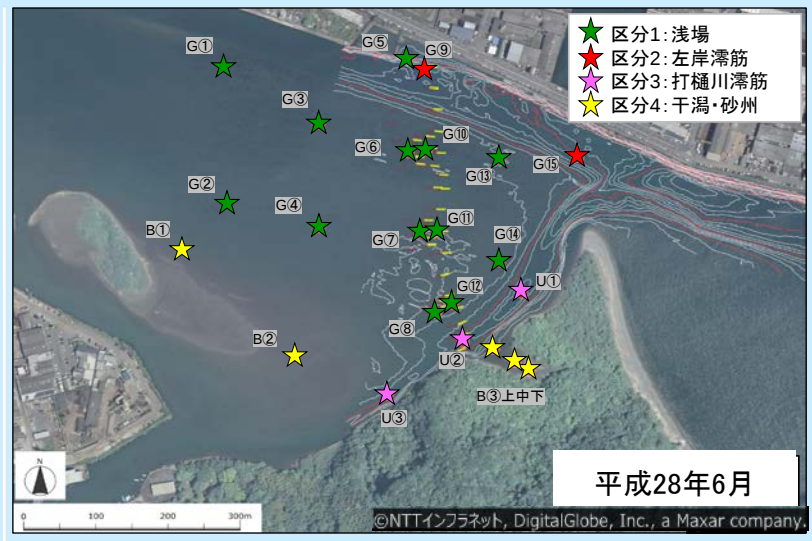
台船を用いた施工方法による河口最浅河床部浚渫面積(最大16,015㎡)と比較して、仮栈橋施工時の河川内杭設置合計面積(150.4㎡)は極小であり、環境への影響は小さいと考えられる。

施工形態	台船施工+架設構台	仮設栈橋施工
概略図		
側面図		
環境への影響	河口最浅河床部1回当りの浚渫面積 最大 $A=16,015\text{m}^2$ 干潟を直接浚渫することはないが、浚渫時の河床部の土粒子浮遊、沈降、堆積の影響が懸念される。	仮栈橋、架設構台杭本数(H400) $N=940$ 本 河川内設置合計面積 $A=0.40 \times 0.40 \times 940=150.4\text{m}^2$ 浚渫面積に比べ極小であるため、環境への影響は小さい。
工事進捗影響	・豪雨時の堆積を考慮し浚渫が必要となる。 ・強風による栈橋への接岸ができない場合工事中断となり、工事期間が延びる可能性あり。	・天候による工事進捗の影響が小さい。
評価	△	◎

2-4 第5回委員会における主な意見の回答

事業中断前と事業再開後において、クラスター分析による底生生物生息環境の類型化を行った。

事業中断前



事業再開後



- ★ 区分1：浅場
- ★ 区分2：左岸滞筋
- ★ 区分3：打樋川滞筋
- ★ 区分4：干潟・砂州

底質が変化しやすい滞筋では年によって類型が若干変化している地点はあるが、分布傾向が過年度と同様のため、ハビタット区分については変化していないと考えられた。